稲むらの火の館 濱口梧陵記念館 津波防災教育センター

やかただより

広　川　町
全戸配布

第９１号
平成３０年５月

「世界津波の日」高校生サミット が和歌山県で開催決定 !!

平成２７年１２月に第７０回国連総会で「世界津波の日」が制定されました。

これを機会に、提唱国である我が国で津波防災に関わる各種会議、事業が開催されています。

本年１０月、１１月に『「世界津波の日」２０１８高校生サミット in 和歌山』が開催されることになりました。世界中から約５０カ国に及ぶ国々から約３００人の高校生が来られます。本会議は、和歌山市内ですが、数日前から県内でスタディツアーが実施されます。広川町では外国からの参加者が「稲むらの火祭り」への参加、「稲むらの火の館」見学に来られます。たくさんの国々から一度に来町されるということも珍しいことだと思います。皆様と共に歓迎したいと思います。

この「高校生サミット」の準備会合が毎月、東京と和歌山で交互に開催されていますが、４月１６日には広川町で開催されました。内閣官房、内閣府、外務省、文部科学省、国土交通省、気象庁、自由民主党、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）、東アジア・アセアン経済研究センター（ＥＲＩＡ）、日中友好会館、和歌山県（世界津波の日高校生サミット推進室）、広川町が出席しての会合でした。

「稲むらの火祭り」の松明所持のテスト等も行われました。出席者一同は、「稲むらの火の館」や「広村堤防」の見学もされました。

平成３０年度が始まりました

新しい年度平成３０年度が始まりました。

今年度も、よろしくお願い申し上げます。

平成２９年度を振り返ってみます。

入館者数は、２９，５９５人でした。前年度は２９，７３２人でしたので、ほぼ横ばいの状況ということになります。平成１９年の開館以

来３４８，２３９人となりました。また、「世界津波の日」の制定をうけまして、外国の方の来館者は５８カ国３４０名で、この数も前年度と同じ位の数でした。

平成３０年度もまた皆様のご協力をいただき「稲むらの火の館」の運営と「津波防災」の啓発活動に努めて参りますので、よろしくお願い申し上げます。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

防災研修に御利用ください

広川町から認められた団体（補助を受けている団体）が防災研修を実施される場合、「稲むらの火の館」へ１年に１度無料で入っていただけます。ぜひ、ご来館ください。「館」も平成１９年の開館から１１年が経過しました。この間、町内の皆様も見学に来ていただいていると思いますが、「世界津波の日」の制定などにより館内の展示もリニューアルされています。

各団体の防災研修等、それぞれの目的に合ったプログラムの設定にも応じますので、ぜひご相談していただきたいと思います。

濱口大明神縁起　（その１６）

濱田康三郎　（**かわせみ**より）

それは前日のものの比ではなく、家々の屋根の瓦は忽ちに飛び散り、壁は崩れ、塀は倒れ、塵烟は朦々として空を覆い、海の彼方からは轟々たる巨砲の如き響が物凄く聞こえて来ました。そして村中の井戸は悉く一時に涸れ切り、入江の前面に横たわっている小島（刈藻島）の方向に太い火の柱が立ち、西北の空は暗黒色を帯びて、陰々蕭殺の気が天地を壓しました。これはただごとではない。村の人々を至急何処かへ避難させねばならないぞ、と考えついて、父が配下の若者達を指図して手配をしている最中に、早くも山なす怒涛はすさまじい勢をもって――広村は全戸海沿いの平地に立ち列んで居るので、ハーン氏の記していられるように、父の家だけが台地の上にあるのではありません――押し寄せたのでした。

父はあわてて自分の家に馳せ戻って家族を避難させ、それから番頭と二人だけ踏み止まって、人々を全部急ぎ立ち退かせ、最後に殿をして村を出ようとしますと、第二の大津波は既にその踵に迫りました。狂者のように野を走り抜け、小川を跳ね越して、漸く村のずっと後方にある小高い岡辺に辿りつき、村民達の寄り合っていた小山（八幡山）まで来た時には、短い冬の日はもうとっぷりと暮れ果てて、月の無い夜は鳥羽玉の暗闇に成っていました。耳に響き聞こゆるはけたたましい人々の阿鼻叫喚と、物凄い怒涛の水音とばかり。あやめもわかぬ真の闇の中に、恐怖に心潰れて方向を失しているものも少なくあるまいと思って、父はとりあえず手下の者共に松明を点けさせましたが、それ位では到底物の役に立ちそうでありません。で、咄嗟の機転で、路傍に積み重ねてあった十数堆の稲叢に火を放たしめました。このあかりを便りにして辛く父の側へ集ったものが、九名に及んだと申します。ハーン氏の稲叢に関する記事は、此の事実を潤色せられたのでありましょう。然し、稲叢の火も暫時の役立ちに過ぎませんでした。再び襲って来た、それ迄のどれよりもずっとずっと大きく烈しい大津波が、遠く此のあたりにまで氾濫して、一瞬の間にそれらの稲叢をはじめ百余軒の人家を根こそぎ引掠って行ったからでした。津波は此の日七回寄せては返しましたが、此の時の第五番目のが最も大きく且つ猛烈であったのです。

その晩小山（八幡山）と隣村の寺（南広村法蔵寺）とに集った避難民は、合計千四百名以上に及びました。しかも夕食時前からの不意の大混雑の為に早くも極度の空腹を訴えた彼等には、差当たっての食物が何よりも緊急な必用でした。それで父はとりあえず寺（法蔵寺）の貯蔵米を借り受けて炊き出しをなし、更に深夜隣村（中野村）の庄屋を訪ねて、無理矢理に年貢米五十石を父一人の全責任に於いて借り出し、村民達の当座の食糧に充てました。

翌日になって村の損害の大要を調査してみますと、田畑その他の分は別として、流失家屋百二十余戸、全潰、半潰、汐入、大小破損家屋は二百余戸に上り、流死人は男女合せて三十名の多きを数えました。前後七回打ち寄せた大津波が、数時間にしてこれだけの大損害を四百余戸のこの村に与えたのでした。父をはじめ村中の人々はあまりにも恐ろしい自然の暴威に、今更の如く唖然たらざるを得なかった、と申しますのは、誠にさもありなんと思われます。

（つづく）

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

＜教　訓＞

津波がおこった時は、橋を渡って
逃げてはいけない、川は早く潮が満ちるから

（安政聞録から）

＜稲むらの火の館の紹介＞

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071　住所　和歌山県有田郡広川町広 671

http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/

*開館時間：午前 10 時～午後 5 時（受付終了 4 時）

*休館日：月曜日（祝日の場合は翌平日）

（世界津波の日の 11 月 5 日は開館）

年末年始(12/29～1/4)